

高等学校地理歴史科（世界史）採点基準

2枚のうち1

【注意】問題によっては、部分点を可とする。

問題番号	正 答	[例]	採点上の注意	配 点
1	1	5		6
	2	1		6
	3	3		6
	4	6		6
	5	6		6
	6	5		6
	7	3		6
	8	4		6
	9	1		6
	10	6		6
	11	8		6
	12	6		6
2	1	3		8
	2	4		8
	3	5		8
3	1	3		8
	2	4		8
	3	6		8
4	1	7		8
	2	3		8
	3	3		8
5	1	3		6
	2	3		6

高等学校地理歴史科（世界史）採点基準

2枚のうち2

【注意】問題によっては、部分点を可とする。

問題番号	正 答	採点上の注意	配 点
6	資料Ⅰより、イングランド国王がイングランド教会の最高首長となることが規定されていることが分かることから、この法令は国王至上法（首長法）の一部である。この法令は、下線部の現国王にあたるヘンリ 8 世が王妃との離婚の許可を教皇に求めた際、教皇がこれを認めなかったことから、ローマ教皇庁からの分離を企図して制定されたものである。 また、資料Ⅲより、国王至上法が制定される以前、ヘンリ 8 世はルターの宗教改革運動に対して批判的な書物を発表したことで、ローマ教皇から高く評価され、「信仰の擁護者」の称号を与えられていたことが分かる。 しかし、ヘンリ 8 世は国王至上法を制定し、イギリス国教会を成立させてローマ教皇庁から分離したことから、ローマ教皇から破門の処分を下される。 以上のことから、ローマ教皇によるヘンリ 8 世の評価は、国王至上法制定の前後で、「信仰の擁護者」という称号を与えられるほどの高い評価から、破門に処されるほどの低い評価に変わった。	内容を正しく捉えていれば、表現は異なっているがよい。	8
	資料Ⅱより、イングランド国教会の慣習に従わない非国教徒（カトリック教徒）が官職（公職）につくことが禁じられていることが分かることから、この法令は審査法の一部である。審査法は、カトリックの信仰と絶対王政の復活をはかったチャールズ 2 世に対抗するために、非国教徒（カトリック教徒）の公職就任を禁止することを目的として議会によって制定されたと考えられる。 また、資料Ⅳより、この法令はイギリスがアイルランドを併合した時に制定された法令の一部であることが分かる。この法令により、非国教徒（カトリック教徒）の多いアイルランドを併合したことで、プロテスタント非国教徒やカトリック信徒から、信仰を理由として、公職就任が制限されていることなどの宗教差別に対する反発の聲が高まったことから、非国教徒にも公職への道を開くことで彼らの反発を緩和するために 1828 年に審査法は廃止されたと考えられる。	内容を正しく捉えていれば、表現は異なっているがよい。	12
7	資料Ⅰから、第一次世界大戦後の国際秩序の構想として、国の大小にかかわらず相互に独立と安全を保障し合うために諸国家の連合組織の形成が謳われていることが分かる。 また、資料Ⅱから締結国がドイツ・ベルギー、ドイツ・フランスそれぞれの第一次世界大戦後の国境の現状維持と不可侵及びライラントの非武装を相互に保障することが規定されていることが分かる。 これらのことから、第一次世界大戦が戦前の勢力均衡を原則とする安全保障政策によって引き起こされたことへの反省から、第一次世界大戦後の国際秩序は、新設された国際連盟の中で集団安全保障の原則が初めて制度化されるとともに、ロカルノ条約によって地域的集団安全保障体制が具現化されるなど、集団安全保障の原則に基づいて形成されたことがその特徴であった。	内容を正しく捉えていれば、表現は異なっているがよい。	10
	まず「国際連盟の紛争解決に関するしくみはどのような特徴があったのだろうか」と発問し、資料Ⅲの第 5 条から、国際連盟では議決方法として全会一致方式を採っていたことや、資料Ⅲの第 16 条から、国際紛争の解決においては司法的な仲介や調停とともに経済制裁を勧告することができるものの、軍事制裁の手段を持たなかったことなどを読み取らせ、国際連盟は加盟国の紳士的な規約遵守の外交方針に依るところが大きく、その強制力が弱く、紛争解決機能に限界があったことに気付かせる。 さらに「国際連盟は実際の国際紛争の解決に当たってどのように対応したのだろうか」と発問し、資料Ⅳが日本と中国の対立を国際連盟が仲裁している様子を描いたものであることや、その仲裁が国際連盟にとって大きな試練であると捉えられていることを読み取らせ、資料Ⅳのタイトルから分かる出版時期と関連させることで、この日中の対立が満州事変を示しており、事変後に常任理事国である日本の国際連盟脱退を招いたことに気付かせる。そして、年表から、国際連盟はギリシア、ブルガリアの紛争解決には成功したものの、常任理事国であるイタリアが起こした第二次エチオピア戦争では紛争解決に失敗し、日本と同様にイタリアの連盟脱退を招いたことを読み取らせ、大国の利害が関係しない中小国の紛争においては迅速な紛争解決に成功したものの、大国が主導した紛争に際しては機能不全に陥り、十分にその能力を発揮しえなかったことに気付かせる。 以上を踏まえ、「国際連盟が存在していたにもかかわらず、なぜ国際協調体制は動揺したのだろうか」と発問し、国際連盟の紛争解決機能に限界があったことを、実際の紛争解決に失敗したことに関連付けて考察させることを通じて、1930 年代に国際協調体制が動揺したことを理解させる。	問いを正しく捉えていれば、内容は異なっているがよい。	14